

医者が仏教に出遇ったら

田畑正久

## はじめに―仏教との出遇い―

私は昭和二十四年、大分県の農家に生まれました。高校を出て運よく九州大学に入学できましたが、大学一回生のときに両親が交通事故で同時に亡くなりました。しかし、浄土真宗のお念仏をいただいたお祖母さんに育てられた、伯父さん伯母さんが、後に残った兄弟四人を温かく育ててくれました。

大学三回生のとき、今度は「学園紛争」という日本中の大学が騒然とする時代がありました。それで五月から十月までは大学の授業がありませんでした。つまり、いろいろなことを忖慮なしに考えざるを得ない状況で学生生活を過ごしたわけです。

そして大学四回生のときです。九州大学には仏教青年会という会があります。学生が二十人ほど生活できる寮がありました。私は剣道をしておりまして、剣道

部の同級生がたまたまその寮に入っていたので、遊びに行くとは非常に楽しそうなのです。

仏教青年会は、無医地区の巡回診療などのボランティア活動をしておりまして、その活動を手伝う学生は寮の部屋代がタダなのです。だから食事代だけで生活ができるというわけです。

私は仏教に惹かれたわけではなく、部屋代がタダに惹かれて仏教青年会に入りました。

仏教青年会に入って二年目、学生の世話係の総務という役割がまわってきました。仏教青年会を代表して挨拶あいさつをしてほしいと言われる機会もありましたが、私は「仏教なんかなくても生きていける」と思っておりましたので、非常にとまどいを覚えておりました。たまたまあるとき新聞を見えていましたら、福岡教育大学仏教研究会の催し物があるという案内が載っていました。私は新聞社に連絡先を

たずねて好奇心からその研究会に行ってみました。

そこで、細川巖ほそかわいわおという先生に出会いました。この先生は化学の教授をされていましたが、ご自宅で仏教のお話を学生さんや一般向けにされていきました。そのときが私にとって、初めて仏教（浄土教）の話をじっくりと聞くと聞くという機会だったので、非常に興味深いとえ話がありました。

先生は、私たちは卵の殻の中にいるような存在なのだとおっしゃったのです。殻というのは「私」「私」わがという自己中心の思いだそうです。その殻の中にいる私は「どうしたらしあわせになれるだろうか」と考える。そうするとやはりみんなから「善い人間だと思われたい、悪い人間だとは思われたくない」、できることなら「損をしたくない、得になることを心がけよう」、もっと言えば「勝ち組の方に入りたい、負け組の方に入りたくない」、そういう善悪、損得、勝ち負けを考えながら一生懸命生きている。しかし、そういうことに振り回されなが



## 目次

はじめに―仏教との出遇い―…………… 3

### 第一章 医者が仏教に出遇ったら

存在の満足……………	16
我愛と我見……………	18
傍観者の批判……………	20
死を見ること……………	21
世俗の物差しでは……………	23
生きることの質……………	25
アンチエイジング……………	27
健康診断の判断基準……………	29
「老衰」という死亡診断書……………	31
患者の意向……………	33

科学的思考による「確率」……………	35
全人的医療……………	38
自然治癒力……………	40
医師への「おまかせ」……………	43
潜在意識の領域……………	45
現代社会の「欲」や「思い」……………	47
満点の健康、完璧な検査値……………	49
本音と建前の葛藤……………	51

### 第二章 老病死とともに

「食べても死ぬ」のです……………	56
心臓に聞いてみてください……………	58
初心忘るべからず……………	60
自分を見つめる……………	62
間柄的な存在……………	65
勿体ない……………	67

不老長寿は幸せか	69
「良くなるじゃるか」	72
いのちの中の領域	74
一緒に歩んでいきましよう	76
老病死を受容する死生観	78
精神的苦悩への対応	80
病名告知	82
スピリチュアル	85

### 第三章 本当の豊かさとは

これから一万年生きられるとしたら	90
「たった五年か」	91
仏さまがいらっしゃる	93
生きる目的	96
「今」を目的に	98
「思い込み」というとらわれ	100

知識量で傲慢になっていないか	102
クオリティ・オブ・ライフ	104
心を耕す	106
外面と内面	109
おかげさま	111
都市社会	113
満足な人生	115
仏の心に触れる	117
「存在する」だけで	119
イキイキの内面	121

### 第四章 仏教が教えてくれること

老病死に出会う	126
苦の原因	128
天人五衰とは	130
頭上華萎	132

生きる意味	185
しあわせを求めて	183
分別	181
あるがまま	178
これからが、これまでを決める	176
一日の誕生と終わり	174
「死」がなくなる	172
生き切る	170
我慢する	168
自我意識	166
希望の明かり	164
不満や不幸の種	162
自然の賑わい	160

## 第五章

今、今日、ここしかない	158
今を生きる	155
物質的な豊かさ	153
絶体絶命	152
死ぬ覚悟	150
水が自在に流れている	148
自分を超えたもの	146
主語の「私」	144
迷惑をかけて生きている	142
取り越し苦労	140
無いものは欲しくなる	138
不楽本座	136
身体臭穢	135
衣服垢穢	134
腋下汗流	134

第一章 医者が仏教に出遇ったら

## 存在の満足

脊髄損傷で首から下のまひという障がいのある星野富弘ほしのとみひろさんの詩に「いのちが一番大切だと思っていたころ 生きるのが苦しかった いのちより大切なものがあると知った日 生きているのが嬉しかった」というものがあります。

失意の中でキリスト教との縁があり、教えによって生きる力をいただいている方です。詩の中で「生きる」から「生きている」という、表現の変化が見られます。現実を受容して、生かされていることの意味に目覚め、精いっぱい生きるさまがうかがえます。

「今、ここに生きている」ということは、誰もが認める事実です。人間として生きている、その上でいかに生きるかが多くの人の関心事です。そして生きることの目標は、誰からも教えてもらわなくとも、「しあわせ」であるとアリストテレスが指摘しています。

しあわせを感じている人は、今、ここで生きていることに充足しているのです。自分の周囲の事象や現実を受容して、「私は私でよかった」とよろこびを表現します。郷土の先人で思想家の三浦梅園みうらばいえん（一七二三—一七八九）はそのよろこびを中国の書籍から引用して「人生恨むことなかれ 人知るなきを 幽谷深山ゆうこくしんざん 華自けずから紅なり」と書で残されています。与えられた境遇を受け取り、精いっぱい、完全燃焼して生きているさまを「華自ずから紅なり」と示されています。

深い思索の跡が書物として残され、現代でも研究されて、時代を超えた評価を得ている梅園といえども、個人の生活においては決して順風満帆の人生ではなかったようです。しかし、その詩に自分の生き方と重ね合わせ、共感されたのでしよう。

豊後ぶんごの地に生をうけ、与えられた時代性、社会性を安んじて受容して、精いっぱい生き切った、成熟した人格としての「足るを知る世界」を生きておられたで

あろうと、書より感じ取ることができたのです。

### 我愛と我見

「我愛<sup>があい</sup>」というのは心の汚れです。いわゆるエゴイズム、利己心、自分の利益しか考えない心です。ある人が奥さんから、「今度の出張は車で行くと数時間かかるので、車で行かずに電車で行ってよ。事故に遭うと困るから」と言われ、自分の事を考えて愛してくれているのだ、と思っていいたら、「あなたが死んだら、私が困るわ」と言われたといえます。相手のことを思っているが、回り回って私のことが一番大事なのです。

医療の現場で親の延命治療を希望している人の話をよく聞いてみると、「親が生きていることが、子どもの私には嬉しいことです」とおっしゃるものの、見方を変えると、苦しい、意識がない、治療のために拘束されている等々、親の状態はお構いなしのようで、「それは親を思っていることですか、子どものあなたの気持ち<sup>きもち</sup>を尊重するためですか」と聞きたくなることがあります。

「自分たちの生活がありますから、介護の必要な親を看ることはできません」「病氣（老化現象と病氣の区別は難しい）だから、病院が看ってくれるのが当然でしょう」と、自分たちがお世話しない、その後ろめたさを補うように、病院には、当然してくれるべきだと、自分たちが理想とする独り善がりの対応を強く求めてくることがあります。これらはまさしく「我愛」と「我見<sup>がけん</sup>」が結びついた結果なのです。

種々の理想主義を主張する人が、皆に平等に、公正にと強く主張しながら、自分に対しては甘く、他に対しては厳しい姿勢を取ることがあります。「我愛」というものは、心の強い汚れというよりは、人間の本質であるということでしょう。